

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館 ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



池玉瀾（一七二七—一七八四）
深草吟詩図
一八世紀後半—江戸時代中期
紙本着色
五八・〇×二五・〇cm

画面中程に配された堂々たる山塊から、右奥の遠山に向かって、広大な空間が展開する。山肌に施された透明感のある淡彩と、軽やかな運筆による披麻皴が、爽快な印象をもたらしている。画面手前、青々と生い茂る巨樹に囲まれた四阿の前に、二人の高士が坐し、傍らに童子が佇む。まさに詩を吟じているところであろうか。卓抜した筆技により、清雅なる理想の世界が、鮮麗に描き出されている。

池玉瀾（本姓を用いて徳山玉瀾とも呼ばれる）は、江戸時代中期に京都で活躍した南画家。夫である池大雅（一七三三—一七七六）に絵を学んだ。夫婦の仲睦まじさを物語るいくつものエピソードが伝わり、二人による合作も残されている。画風は大雅に大きな影響を受けているが、より柔らかな傾向をみせる。

（主任学芸員 浦澤倫太郎）

No.
148
2022年度 | 冬 |

鴻池朋子展後日談と糞尿譚

館長 木下直之

前号で大歓迎した「鴻池朋子さん御一行」は、本号刊行時はまだ当館に逗留中ですが、やがて旅立ち、裏山を住みかとした「皮トンビ」も飛び去ってしまいます。翼を広げると十二メートルにもなるトンビを裏山に吊るしたいという鴻池さんからの提案を受けて、さてそこはいったい誰の土地なのかかわからず、学芸員と総務課員が連れ立って静岡地方事務局などを訪れ、登記簿の閲覧から始めたのが昨年夏のことでした。県有地と私有地が入り組んでいましたが、無事に地権者の了解を得て設置にこぎつきました。会期中には、多くの方々が美術館を抜け出し、マップ片手に足を運んでくださいました。それは、「開かれた美術館」という響きの良い言葉の実現に見えました。

しかし、ハタと気づいたのは、美術館の前にも彫刻プロムナードと呼ぶ場所があり、たくさん彫刻が置かれていることです。当館と同時の誕生、専門家による委員会が設けられ、置くべ

き彫刻が慎重に選定されました。その論理もまた「開かれた美術館」のはず。一九八六年の時点で、野外彫刻とも

屋外彫刻とも呼ばれたそれらには大きな期待が寄せられていました。しかし、今から思えば、美術館を開いたのではなく、展示室を広げただけかもしれない。茶畑の中の佐藤忠良「みどり」を目にするたびにそう思います。

もちろん、「皮トンビ」に対しても同じ見方はできる。しかし、美術館の前庭に対して裏山は対極だし、三七年間不動の彫刻に対して、「皮トンビ」はわずかな時間そこにあり、やがて姿を消す。石や金属の彫刻に対して、皮の絵はふた月余りの間にも変化を来したでしょう。少なくとも、「皮トンビ」はひとの足と目を美術館の裏に向かわせた点で、当館の歴史に残ります。その鴻池さんによって、展示室の随所に動物の糞（ただし作り物）が置かれました。鴻池さんによれば、「そこにあると和むでしょ」（会期中に会場

でそう発言）。

私は「そこにある」と和むのではなく、「それを口にすると和むこと」に日頃から多大な関心を寄せて来ました。ただし「糞」はあまり使わない。「フン」と読む人と「クソ」と読む人がいるはずですが、それよりも「ウンコ」か「ウンチ」が大問題、そして後者は姑息だととらえて来ました。

紙面が残り少なくなつたことを気にしつつ、私の宝物を紹介します。フランスワ・ラブレール著・渡辺一夫訳『第一之書 ガルガンチュウ物語』白水社、昭和一八年一月二八日発行。洒落たフランス装丁。現在出回っている渡辺訳岩波文庫でも宮下志郎訳ちくま文庫でもありませんよ。裏表紙には「二六〇三年」の文字！

三年前、世の中が皇紀二六〇〇年に沸きかえっていたころ、渡辺はこんな世界に目を向けていました。その第一八九頁には、「雲谷齋よ、びり之助よ、ぶう兵衛よ、糞まみ郎よ、そなたのう

んこがぼたぼたとわしらの上にまかれるわい」という名高い雪隠の訴えがある。

古今東西糞尿譚がなくならないのは、糞尿が人間の一部だから、というよりも人間そのものであり、それならそれがどう表現され、どう憚られ、どう隠されて来たかを知りたいと思うのです。展覧会ごとに一度は何かを話す決めて、回を重ねて来た館長美術講座で何とか話題にしたいと願いつつ苦節四年、鴻池さんのお陰でついに好機は到来したのでした。

「餓鬼草紙」（東京国立博物館蔵）に始まり村山槐多「尿する裸僧」（窪島誠一郎コレクション、長野県立美術館蔵）へと至る「日本美術糞尿譚」を、これを書いている今は話すつもり、みなさんが読んでいる今は話したことになつてはいるはず。

糞尿の親戚たる屁についても忘れるなかれと教えてくださったのは、前館長芳賀徹さん（江戸の花咲男―源内をめぐる比較放屁論）『文明としての徳川日本』筑摩書房）や当館専門委員榊原悟さん（『文字絵の図像学』『日本美術史の杜』竹林舎）でした。こうした糞尿屁譚に興じた先人たちに敬意を表して筆を置くことにします。

美術館の翼の風を思いつつ

美術館は地域文化の一大拠点

人間の心に内在

するものを表現す

る手段のひとつに

美術があり、そこ



会長 曾根正弘

には創る人と見る人の関係が生まれま
す。美術館は両者の間にあって歴史観、
価値観、洞察力をもって鑑賞の場を構
築していると解釈しております。

昨年三十五周年を迎え、この度改め
てその祝賀を挙げる事となった静
岡県立美術館は地域の美術愛好家の関
心に応えつつ、内外の歴史に関わる事
物の展示による啓蒙啓発、延いては地
域文化の発展に大きな役割を果たして
来られました。

静岡県立美術館友の会は発足時を同
じくし鑑賞派、実践派ともに美術館の
多大なサポートをいただきながら活動
を続けてまいりました。そして先頃は
当周年記念事業として会員による「誰
でもアーティスト展」を開催し、併せ
て木下館長による記念講演をいただく
ことができました。今後とも美術館の

ファンを増やすべく、館長、学芸員の
皆様のお力をお借りしながら取り組ん
で行く所存です。

静岡県立美術館友の会会長 曾根正弘

二〇二二年は新型コロナウイルスで延期して
いた35周年記念事業「誰でもアール
ティスト展」、「木下館長講演会」（館長の
推し、静岡県立美術館の3.5作品・会員
の推し、静岡県立美術館の3.5作品）、「青
森旅行」を美術館と会員の皆さまのご
協力で成功させることができました。



青森旅行で訪れた十和田市現代美術館にて

事業委員会は、一貫して友の会の会
員になって良かったと感じてもらえる
講座・旅行・イベント等の企画運営を
心がけています。

木下館長が就任されてから友の会对
象の講座を毎年開いて下さって、歴史
的民俗学的な視点など多角的に文化を
考える機会を与えていただいています
が、錆びついた私の脳は実は混乱しか
けています。初めて館内へ足を踏み入
れた時、予想外の広いエントランス空
間に驚き戸惑って迷子の気分になった
静岡県立美術館。もう少し来場者に親
切な案内を感じてきましたが、今は
これこそが芸術だと断言できない多様
な価値観が存在していて、迷いながら
自分で価値観や方向性をつかんでいく
時代。木下館長のお話と静岡県立美術
館のエントランスはどこことなく似てい
ると感じたりしています。

事業委員長 大津裕子

友の会・会報委員は友の会の設立趣
旨に則り、会員への情報提供と共に対

外的広報誌として「プロムナード」を
発行しております。一九八六年（昭和
六十一年）美術館開館、友の会設立と
共に計画され、爾来年三回（現在は四
月、十月の年二回）発行し、今年度冬
号で三十五周年記念号として一〇六号
を数えることになりました。内容は友
の会で行われる事業予定、事業報告と
して実技講座、年二回ほど行われる旅
行、特に館長にお世話になっている館
長講座、「学芸員室より」として学芸

員のお手を煩わせている美術館の企画
展等の紹介、会員紹介等多岐にわた
ります。その中でプロムナード特有な記
事として「アトリエ訪問」があります。
静岡県と当美術館にゆかりのある作家
のアトリエを訪問してお話を伺い記事
にするもので、初期の頃には、秋野不
矩、曾宮一念と錚々たる方が掲載され
ており驚かされます。全くの素人の会
報委員にとつて人選、アプローチ、取
材、作文、編集することはかなりのプ
レッシヤーですが、出来上がったプロ
ムナードをお届けして作家の方に喜ん
で頂いたときは、担当者として非常に
喜びを感じます。これからも友の会の
会報誌として会員の皆様により喜んで
いただける充実した紙面造りに励んで
いきたいと思っています。

会報委員長 山田克人

近代の誘惑 —日本画の実践

2023年2月18日(土)～3月26日(日)

当館の所蔵品・寄託品から作品を選りすぐり、近代の日本画をご紹介します。展覧会を開催します。

「日本画」とは、新たに登場した「洋画」に対応するものとして、明治期に使われるようになった言葉です。激変する時代の中で絵画をめぐる枠組みも解体・再構築されていきますが、本展では、個々の作品における画家の具体的な試みを丁寧に観察することで、近代日本画の理解につなげていきたいと思えます。

展示はほぼ時代順に構成しますが、ここでは、特にポイントとなる時代をご紹介します。

まずは冒頭、幕末から明治への橋渡しの時期。絵画における江戸から明治への連続性をご覧いただくために、展覧会は、江戸時代の画壇の中心にあった狩野派から始めます。冒頭を飾る狩野立信（一八一四～一八九一）は、狩野宗家最後の当主として時代に翻弄された画家の一人ですが、のちにフェノロサに古画の鑑定法を伝えるなど、近代日本画成立のための基盤作りに役割を果たしました。正統を受け継ぐ狩野派は、それ故に、明治以降の絵画革新のなかでひとつの拠り所となりえたのです。続けて、出品作家のうち唯一十八世紀生まれの菊池容斎（一七八八～一八七八）が手がけた勤王思想に基づいた作品の数々や、幕末京都画壇における近代的な視覚を先取りした風景表現など、転換期を彩った絵画の諸相をご覧いただきます。

大正時代の多彩な表現は、展覧会のひとつの山場となります。横山大観（一八六八～一九五八）、尾竹竹坡（一八七八～一九三六）という二人の個性がぶつかる屏風の競演が目引きます。が、国画創作協会を舞台に活動した京都の若手画家―土田麦僊（一八八七～一九三六）、村上華岳（一八八八～一九三九）、野長瀬晩花（一八八九～一九六四）らの作品も見逃せません。古

典から近代に到るまで多様な西洋絵画に学び、それぞれに独自の世界を切り開こうとした彼らの作品からは、日本画の枠を広げ、その限界に挑戦するようなエネルギーを感じます。彼らを導いた師・竹内栖鳳（一八六四～一九四二）とその同輩らの作品とともに、京都画壇が受け継ぐ伝統と革新の精神と、それらが花開いた大正時代の風に触れてください。

展覧会の最後にご覧いただくのが、昭和・戦後期の作品です。油絵と見紛うような厚塗りの画面など、ここに到るまでの一連の作品とは、かなり異質なものに感じられるかもしれません。

終戦直後の日本画滅亡論を経て、日本画とはいかにあるべきか、日本画を描く意味は何か、が改めて問い直された時代の試行錯誤の成果といえますが、しかし、これらの問いに対する答えは、現在に至っても明確にはなっていない。それぞれの作品の真摯で切実な実



下条桂谷《勤王新年河図》1906（明治39）年 個人蔵



木村武山《羽衣》（右隻）1920年代後期-30年代前期（昭和初期） 静岡県立美術館蔵

践の中に、その答えの糸口を探っていくことが、この展覧会のテーマとなっています。

これまで展示機会のなかった作品をご紹介します機会としても意識し、当時一大勢力でありながら現代ではほとんど顧みられることのない、伝統絵画保存を目指す一派、いわゆる旧派の画家にも注目していきます。おなじみの静岡県立美術館の顔や、隠れた意外な名品にも出会える貴重な機会、どうぞご堪能ください。

（学芸課長 石上充代）

2022年度収蔵品展 光—The Light

2023年2月14日(火)～4月9日(日)

光がもたらす視覚的な効果は、アーティスト達にインスピレーションを与えてきました。この展覧会では、当館の現代コレクションの中から「光」をキーワードに絵画、立体、写真の作品を取り上げます。ここでは、二つの切り口から出品作品の一部をご紹介します。

光を作品の要素に取り入れた作品

ダレン・アーモンドの《Civil Dawn@Mt. Hiei. 7》(ともに二〇〇八年)は、夜から朝へと移り変わる最初の太陽の光の下で長時間露光し撮影された作品です。日本の比叡山で撮影されました。霧がかつた薄明るい光に照らされたその場所

が、静寂さや空気感をも包み込むかのように捉えられています。アーモンドは、この作品を制作する過程で、実際に日本を旅し、この土地に暮らす人々と対話をして、彼らの記憶や、物語を手がかりにして制作にのぞんでいます。撮影された時間の太陽の光、土地の気候、その場に赴き撮影する作者の身体と行為によって捉えられた唯一無二のイメージです。

森万里子の《Higher Being 1》(二〇一三年)は、作者が目に見えないエネルギーに触発され沖繩の海を眼前にして描いたドローイングを元に、コンピュータで作成した、フォトペインティング作品です。森は、《Dream Temple》(一九九九年)以来、目に見えない「内なる光」を創造の源としてきました。芸術とテクノロジーとの共生を信念に掲げ、原子の粒子から多元的宇宙へとつながるあらゆる存在の相互関連性について長年調査をおこなっています。本作で描かれているパールのような形をした無数の球体の粒は明るい光の円環で覆われ、周囲に光やエネルギーを放射線状に放っているかのようです。想像できる限りの極小の宇宙にフォーカスした、渦を巻く粒子、原子エネルギーの循環が表現されています。

光により立ち上がるイメージ

大庭大介は、新しい絵の具のもつ素材の特性に目を向け、展示空間にある光や見る人の視線、動きといった「絵画」を成り立たせるまわりの状況までも作品に内包させる絵画を制作しています。《LOG (Iceland)》(二〇一四年)は、寒い冬に、滝全体が凍結してできる風景が描かれた横五メートルの絵画作品です。偏向パールの絵の具が用いられており、光の移ろいや鑑賞者の見る位置によって、イリュージョンが立ち上がりまた消えていきます。同じ作者の《THE BATTLE STAGE》(二



ダレン・アーモンド (左) 《Civil Dawn@Mt. Hiei. 7》2008年、(右) 《Civil Dawn@Mt. Hiei. 8》2008年
©Darren Almond



森万里子 《Higher Being 1》2013年 ©Mariko Mori

〇一六年)は、あらかじめ顔料に備わったホログラムの効果により、銀、緑、黄、橙、赤、紫、青といった光のスペクトルが絵画全面にわたって一度に鑑賞者の目に入ってきます。大庭は、この作品で絵の具の可塑性と、描く行為の身体性、そして光のスペクトラムを効果的に引き出すことを追求しています。

嵯峨篤は、合板とウレタン塗料を素材に用い、表面に塗装と研磨を繰り返すことにより、透明な輝きを放つ繊細な質感を生み出す作品を制作しています。《Inside 006 (夕顔)》(二〇一六年)では、正方形の支持体に、深い青の地と香道における源氏香の図柄から引用した、五本のストライプの図が描かれています。マトリックスの塗料を使用することによって、描かれたストライプが、わずかな光の屈折や鑑賞者の視点によって、見え隠れし、それにより地の青が揺らぎをみせます。

(上席学芸員 川谷承子)

『古きフランスのピトレスクでロマンティックな旅： オーヴェルニュ編』におけるウジェーヌ・イザベイの 挿絵の成立背景について

主任学芸員 貴家映子

『古きフランスのピトレスクでロマンティックな旅』(Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France 以下、『古きフランスの旅』と省略)は、フランス幻想文学の嚆矢として知られる著述家シャルル・ノディエ、同国の文化行政に多大な貢献をしたテロール男爵、王立美術館の要職にあったアルフォンス・ド・カイユーが創始した一大出版プロジェクトである。フランス全土の魅力ある景観や歴史的建造物を地方ごとに紹介するシリーズ本で、一八二〇年から一八七八年まで、約六十年の長きにわたって出版が継続され、ノルマンディー編第三巻の刊行をもって未完のまま幕を閉じた。リトグラフによる挿絵は計三千枚近くにおよび、関与した画家は百八十二名に上る。

当館は、ノルマンディー編、フランシユールコンテ編に次いで三番目に出版されたオーヴェルニュ編の二百七十余りの挿絵のうち、ウジェーヌ・イザベイが手がけた十七葉を所蔵している。オーヴェルニュ地方は、火山性の大地が生み出す独特の景観が自然の廃墟に喩えられ、畏怖と崇高の感情を呼び起こすと、本編序文において特徴づけられる内陸の土地である。一方、作者のウジェーヌ・イザベイは、ノルマンディー地方の海岸、とりわけエトルタの景観美の発見者として知られるロマン主義の海景画家である。

幼い頃は海軍に憧れ、各地の浜辺や港に足繁く通ったイザベイの生涯を見渡すと、『古きフランスの旅』という大プロジェクトの中で、山がちなオーヴェルニュ地方編にのみ協力することとなったのはなぜか、という疑問が生じる。本稿では、画家の前半生をたどりながら十七葉のリトグラフの成立背景を考察してみたい。

イザベイの父ジャン・バティストは、ナポレオンの台頭から第二帝政の始まりまで、変転する政治体制を通じて芸術関係の要職に就いた装

飾家・肖像画家である。この世故に長けた芸術家は、息子を美術学校へは通わせず、自身や娘婿で装飾画家のシャルル・シセリによる手ほどきで画家となる修練を積ませた。

思春期のイザベイはショワズール通りにあったノディエ邸のサロンに父とともに出入りし、『古きフランスの旅』がまさに着想される場に立ち会ったとされる。その交流のなかでノディエ以下立役者三名によるノルマンディーへの取材旅行に齡十六で同行し、さらに、一八二一年のイギリス旅行にも随伴した。同年にノディエが刊行した旅行記『ディエップからスコットランドの山々への旅』には、挿絵二点を寄せている。こうした経緯から、テロール男爵が父親を通してイザベイに協力を要請したのは至極当然と言えよう。ところが、結果としてノルマンディー編に六本の挿絵を提供したのは父親の方であった¹⁰。

ある回想記によると、ウジェーヌは、ノルマンディー編の刊行が始まった一八二一年の時点では、水彩画ばかりに親しみ、油彩画の技法には習熟していなかった。父ジャン・バティストは翌一八二二年のイタリア行きに息子を帯同しており、前世紀以来盛んにおこなわれたグラントゥアーの伝統に則り、同地を訪れずして芸術

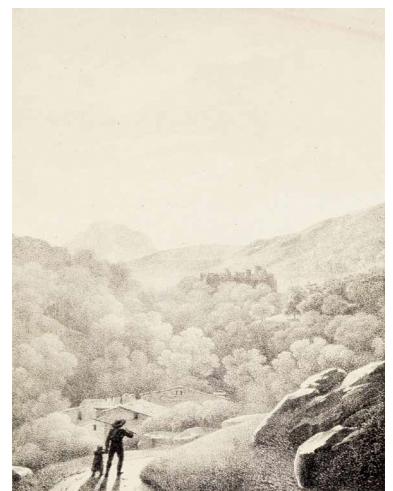


図1 ジャン・バティスト・イザベイ《クレルモン近郊のロワイヤの峡谷》リトグラフ・紙、1818年、ミネアポリス美術館蔵 The Ethel Morrison Van Derlip Fund

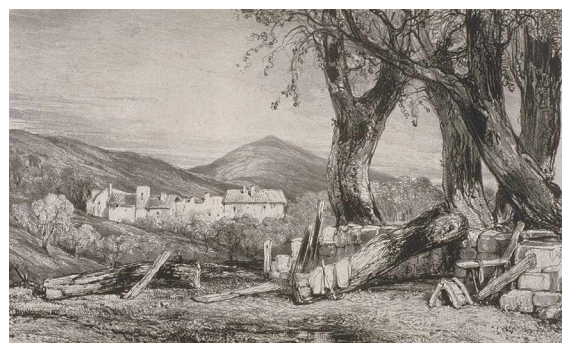


図2 ウジェーヌ・イザベイ《ロワイヤの峡谷》リトグラフ・チャイナ紙、1830年、当館蔵

家としての息子の教育は完了しないと考えたのかもしれない。サロンへの初入選を果たし、一人前の芸術家としてのお墨付きを得るのは一八二四年。翌年の三月には次のフランシユールコンテ編の広告が雑誌に掲載されていることから、この頃にはノルマンディー編の挿絵担当者はおおむね定まっていたと推測される。

イザベイが満を持して『古きフランスの旅』への協力を果たすのは、一八二七年に二度目のサロン出品を果たし、ノルマンディーの海岸を描いた《ディエップの嵐》が第一席獲得と王家買い上げという榮譽に浴した後である。一八二八年十月、イザベイはクレルモン・フェランのグラ通りの素描を制作し、さらに翌年には同地を再訪して、ティエール、ボン・ギボ、ロワイヤ、モンドール、イソワール、そしてシヨードゼーグを描いた素描を残している¹³。

同じ内陸の土地でもフランシユールコンテ編ではなくオーヴェルニュ編に取り組んだのは、一八一八年に同地を訪れた父親からその美しい景

観を聞き知っていたからか、あるいは、その経験に取材した父の作品への対抗心からか。同じロワイヤ峡谷を描いた二人のリトグラフを比較すると、細かな諧調の変化で奥行きを表現する父の作品（図1）に対して、ウジェーヌの作品（図2）では、右側の木々にはクレヨン的一本の線描も露わな粗々しい表現が見られ、地面の描写では版を削って質感を表すなど、即興的とも言える特徴が指摘できる。フランスにおけるリトグラフの黎明期に制作された父の作品を超えて、この媒体の新しい可能性を切り開こうとする大胆さが垣間見える一枚である。

北アフリカへの従軍や結婚など、公私ともに重大なイベントが続いたイザベイは、以降、本シリーズに協力しておらず、ノルマンディーに次いでなじみの土地であったプルトーニユ編の配本が始まる一八四六年頃、パリや地方での展覧会に参加する間に足を運んでいたのは、隣国ベルギーやオランダの海岸であった。なお、百五十点を超す挿絵によってプルトーニユ編に貢献したのは、甥のウジェーヌ・シセリである。¹⁵

『古きフランスの旅』へのイザベイの参加が途絶えた背景には、編集方針の転換が関わっていた可能性もある。「これは発見の旅ではなく印象の旅である」とノディエが第一巻冒頭で記しているように、本シリーズは当初、主観を重んじ、詩的で感情的な特徴を有していた。やがて、図書館長の務めや自作の執筆に多忙を極めたノディエの手が離れるにつれて、題材を取り上げる際の科学性、実証性を重視する方針へと転換していったとされる。¹⁷

膨大な数に上る挿絵の制作は徐々にシステムティックに進められるようになり、数人の画家が現地で担ったデッサンがパリへ送られリトグラフに仕上げられた。また、主題の選択はもちろん構図や演出についてもテロール男爵が指示

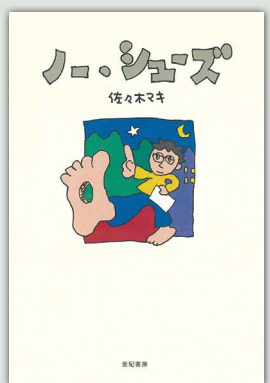
を与えるため、そうした要求に柔軟に対応できる画家が望まれるようになった。例えば、ドーフィン編にいたっては、テロール男爵の弟子であったレオン・サバティエが現地取材を一任されている。ドラマティックな構図や陰影、即興的な筆致が魅力であったイザベイの作風や制作スタイルは、テロール男爵の要請と折り合わなくなっていたのだろう。

オーヴェルニュ編全体の挿絵を見渡すと、ヴィルヌーヴの手による挿絵は三十点、ドーザは四十点以上、序文で多大な貢献者として特に言及されているジョランは五十点以上を数え、イザベイの手になる十七点の特徴が本地方編の基調をなしているとは言い難い。しかし、十代でノディエの薫陶を受け、臨場感や即興性を感じさせる挿絵を提供したイザベイの参加が、本地方編の性格を過渡期的なものにしている可能性はある。これについては、作品同士の綿密な比較を行い、本文との関係を精査しつつ、稿を改めて考察を深めたい。

『古きフランスの旅』成立の背景には、当時の社会、歴史、文化が網の目のように絡まっていた興味がつきない。その一端は、イザベイという一画家の参加だけに焦点を当てても立ち現れてくるのである。

- 1 La site web de l'exposition, *Fabrique du Romantisme*, du 11 octobre 2014 au 18 janvier 2015. Le musée de la Vie romantique (<http://voyagespittoresquesparis.fr/>, 二〇二二年十一月十三日最終閲覧)
- 2 Charles Nodier, Justin Taylor, Alphonse de Cailleux, *Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France*, Vol.1, *Auvergne*, Gide fils, Paris, 1829, p.2.
- 3 Gustave Nicole, *Sur la plage*, *Etréat*... T. Coehard, Le Havre, 1861, p.14.
- 4 イザベイの生涯の事績については主に以下の文献を参照した。但し、確認できた原典資料についてはその書誌情報のみを記載した。Pierre Miquel, *Eugène Isabey, 1803-1886 : la marine au XIXe siècle*, Vol.1, Éditions de la Martinielle, 1980.

- 5 Miquel, *op.cit.*, pp.26-28.
- 6 Michel Salomon, *Charles Nodier et le groupe romantique d'après des documents inédits*, Perrin, Paris, 1908, pp.104-105.
- 7 Marie Mennessier-Nodier, Charles Nodier, *Épisodes et souvenirs de sa vie par Mme Mennessier-Nodier*, Didier, Paris, 1867, p.243, cité par Ségole Le Men, "Les Voyages pittoresques et romantiques dans l'ancienne France de Taylor et Nodier : un monument de papier", *Voyages pittoresques : Normandie, 1820-2009*, exhcart. Rouen, Musée des beaux-arts, Le Havre, Musée Mairaux, Caen, Musée des beaux-arts, Sivarana, 2009, p.43.
- 8 Charles Nodier, *Promenade de Dieppe aux montagnes d'Ecosse*, J.N. Barba, Paris, 1821.
- 9 つれに対する快諾の返書も残されていない。Miquel, *op.cit.*, p.36.
- 10 各巻の最後には購読者の一覧と、挿絵を担当した画家のリストが付された。 *Voyages pittoresques ...*, Vol.1, *Ancienne Normandie*, Gide fils, Paris, 1920, pp.127-131.
- 11 Comtesse de Bassanville, *Les salons d'autrefois : souvenirs intimes. Le séne. Isabe. Madame la comtesse de Rumfort, M. de Bourrienne*, Paris, 1862, p.165.
- 12 *Le Diable boiteux : journal des spectacles, des moeurs et de la littérature*, Paris, 19 mars 1925, cité par Juan Plazaola, *Le baron Taylor: portrait d'un homme d'avenir*, Fondation Taylor, Paris, 1989, p.58.
- 13 Miquel, *op.cit.*, pp.45-51.
- 14 ウジェーヌ自身が同行した可能性も示唆されている。Miquel, *op.cit.*, p.30.
- 15 Philippe Brochard, *Eugène Ciceri (1813-1890) : Peintre, lithographe et enseigner le paysage au XIXe siècle*, thèse de doctorat en histoire, Université Bourgogne, Franche-Comté, 2020, p.161.
- 16 *Voyages pittoresques...*, Vol.1, *Ancienne Normandie*, *op.cit.*, p.5.
- 17 Alexandr Bonatos, "De l'archéographie à l'archéologie pittoresques", *Cahiers d'études nodieristes*, No.5, 2018, 一八四四年に亡くなったノディエの名前は、一八五四年に配本を終了するドーフィン編から著者として記されなくなる。貢献したのは最初の二巻のみ、とこの本人の証言が残りのフランスエロレン編の途中からノディエは手を引き退くという先行研究もある。 Georges Zaragoza, "Voyages Pittoresques et romantiques dans l'ancienne France l'apport de Nodier", *ibid.*, p.60.
- 18 Anita L. Spadatore, "J. D. Harding and the Voyages pittoresques", *Print Quarterly*, Vol. 4, No. 2, 1987, p.142.
- 19 Spadatore, *op.cit.*, pp. 148-149.



本の窓
 佐々木マキ著
 『ノー・シューズ』
 亜紀書房 二〇一四年

いまや美術館での絵本の展覧会は当たり前になっていきますし、佐藤忠良の『おきなかぶ』、元永定正の『ももこもこ』など、著名な作家が手がけ、ロングセラーとなっている絵本も数々あります。美術と絵本は深い関係にある、とはいえ、村上春樹の書籍の装丁などでも知られる佐々木マキが、美大時代の教官であった秋野不矩に福音館書店の松居直を紹介されたことをきっかけとしてナンセンスマンガから絵本の世界へ足を踏み入れたとは、本書を読むまで知りませんでした。教育者としての秋野不矩の一面に触れるとともに、美術と絵本の具体的なつながりを身近なところで実感させられました。美術と絵本とそれをとりまく人々、探ってみたいテーマです。

(学芸課長 石上充代)

有度山にうまる

総務課主任 加藤小百合

総務課の職員として約二年前から勤務している。美術には明るくないが、三十数年前から美術館にはちょいちょい来たことがある。この縁をたよりに、埋もれた記憶を掘りおこし、美術館にまつわる思い出をまとめてみたい。

美術館の思い出―小学五年生の夏の自由研究で調べた古墳を思い出す。美術館の周りには古墳がたくさんある。しかも円墳が中心だ。谷田十七号・五十二号・五十三号墳と、宮の後公園、ひょうたん塚公園は炎天下の中を何度も歩いて、フィルムがいっぱいになるまで写真に撮った。―美術館の裏にある五十四号・五十六号墳に行かなかったのは、暗くなるし蚊に刺されるからと母が嫌がったからのように記憶している。

円墳がどうして集まっているのか、埋蔵文化財研究所の人へ電話で問い合わせた記憶がある。思い出して要約すると、「古墳をつくる流行が都から地方へどんどん広まっていった、昔は豪族の長だけにつくる古墳が、時代



谷田17号墳

ある。思い出して要約すると、「古墳をつくる流行が都から地方へどんどん広まっていった、昔は豪族の長だけにつくる古墳が、時代

が下るにつれて、その地域で少し偉かった人、功績があった人にもつくるようになった。詳しくは焼津中央高校郷土研究部の本にある」という回答だった（はずだ）。―その本は、市立図書館にもなくて、県立中央図書館にもなくて、当館の図書閲覧室にもなくて、結局、秋口過ぎにたまたま訪れた登呂博物館の売店に売っていた。

いろいろ思い出してきた。《四角柱と丸い石》の傾いている四角柱の下に入って、いかにもしょつていっているように見せたり、上に手を添えて押し倒しているように見せたりするのがおかしくて、友達とけらけら笑いあったこと（※今は周囲の芝生が立入禁止になっているので、再現しないでください）。完成したばかりのログ館の屋根に反射した日光がまぶしすぎて、遮光下敷きでカバーしたこと。ピアノの発表会に出演する友達が出演直前に池に落ちたこと…。

数百年後、ここを歩く人は残されたものを見て何を思うのだろう。その時の専門家はどうか解釈するのだろうか。見つからなかった本や自由研究の思い出は埋もれたままでいいが、少なくとも子どもの頃の思い出とつながるくらい身近なところであってほしい。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)
※2023年1月10日(火)～2月13日(月)は工事休館

アクセス

- ◎JR「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡IC、清水ICから約25分 日本平久能山スマートICから約15分
- ◎新東名高速道路 新静岡ICから約25分

ウェブサイト：<https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>



※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742



静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

2023年度企画展のご案内

センス・オブ・ワンダー：感覚で味わう美術（仮称）
4月18日(火)～7月9日(日)

糸で描く物語 刺繍と、絵と、ファッションと。
7月25日(火)～9月18日(月・祝)

大名名(スーパースター)の名宝―永青文庫×静岡県美の狩野派展
10月17日(火)～12月10日(日)

天地耕作(あまつちこうさく)展
2024年2月10日(土)～3月27日(水)

※展覧会名、開催期間は、いずれも予定であり、変更となる場合があります。

静岡県立美術館 友の会

静岡県立美術館友の会は、「芸術を愛する人々が、会員相互の親睦を深め美術館の活動を後援し、芸術文化の普及を図っていく」という理念のもと、美術館の協力を得て活動しております。

この会は、講演会・講座などの主催や会報の発行・鑑賞会・研修旅行を実施しています。さらに美術館活動への協力・援助を通して、県民1人ひとりに愛され親しまれる美術館となるよう協力しています。

入会手続きの詳細は友の会事務局まで
〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
Tel・Fax 054-264-0867
Email tomonokai@spmoa.shizuoka.shizuoka.jp
<https://www.kenbi-tomonokai.jp/>

- 特別会員(1口) 10,000円
- 一般会員(1名) 5,000円
- 親子(キッズ)会員(1名) 3,000円
- シニア会員(70歳以上 1名) 2,500円
- 学生会員(高校、大学、専門学校 1名) 1,000円
- 賛助会員(企業様向けとなります。お問い合わせください。)
- プレゼント会員

友の会の「会員証」をプレゼントしませんか? 「会員証」を友人や知人に進呈することができます! 詳しくは友の会事務局にお問い合わせください。

事業委員、会報委員募集中

友の会では各事業の計画、運営、会報誌「プロムナード」の編集と一緒にお手伝いして下さる方を募集しています。ぜひお気軽にご参加ください。